

古典的メレオロジーとカテゴリー横断的和の問題

北村 直彰

はじめに

古典的メレオロジー (Classical Mereology、以下“CM”と略記) と呼ばれる部分-全体関係についての標準的な理論は、部分-全体関係に関わるさまざまな概念を明確に定式化しうる非常に豊かな表現力をもつ一方で、実在の構造を正しく捉えていない理論であるとしてしばしば批判の対象となる。CMは、それが備える無制限構成 (Unrestricted Composition) の公理——任意の対象のあつまりにたいして、そのあつまりに属する対象のすべてだけを部分とする対象の存在を認める公理——によって、深刻な問題を引き起こしてしまう莫大な数の「和」(全体) の存在にコミットするようになるからである。もしCMのコミットする対象が真正の存在者として考えられないものであるならば、部分-全体関係についての形式理論としてのCMの妥当性はせいぜいのところ、無制限な構成が成り立つようなある特定の領域へと制限されるのでなければならない。

そうしたCMの存在論的コミットメントの問題において、CMの妥当性を疑う強力な根拠を形成しうると考えられるのが、複数の存在論的カテゴリーにまたがって部分をもつ「カテゴリー横断的和 (transcategorical sum)」である。CMの無制限構成の公理は、カテゴリー横断的な和の存在を通常の和の場合とまったく同様に認めなければならないが、そのような和が存在するという想定は、以下で説明するように、現代形而上学の中核であり基本的な枠組みとなっている存在論的カテゴリー論¹の諸原理に抵触してしまうからである。A. C. ヴァルツィは、CMが引き起こすカテゴリー横断的和の問題について、メレオロジーが存在論的に無垢である——どんなものであれいくつかの対象に関してそれらのメレオロジー的和を考えても、新たな存在者にコミットすることにはならない——というテーゼ (以下“IM”と略記) に基づいた解消が可能であると主張